

岡田泰男先生の訃報に接して

慶應義塾大学名誉教授岡田泰男先生が、2014年7月13日に76歳の若さでお亡くなりになりました。まだまだ、多くのことをご教示いただきたく思っていた矢先でしたので、突然の訃報に驚きもし、また仰ぎ見る大樹を失った喪失感で呆然としております。今回、私が会誌に先生の追悼文を書くよう依頼されたのは、私が先生の「一番目」の弟子だったからだろうと推察しているのですが、今改めて先生のことについてあまりに知らないことが多すぎて愕然としています。先生とは大学院時代に教室で研究内容について話をするのが常で、プライベートな話はほとんどしませんでした。私はそれが先生の研究姿勢とも解していましたので、特段不審にも思いませんでしたが、はて先生についてどのようなことを知っているのか問われれば、実に心許ない気がします。そんなわけで、先生の追悼文を書くのに私がふさわしいかと言うといささか疑問もあるのですが、これも「一番目」の弟子の役目と思い、極々簡単に先生のご研究の足跡を辿って追悼文に代えさせていただきます。

先生は数多くの業績を残されましたが、やはり若き日にコーネル大学に留学され、アメリカ公有地制度史の泰斗であったポール・ゲイツ教授の指導のもとで進められた研究、『アメリカ公有地制度史の研究』（陽樹社、1973年）が代表作としてあげられると思います。同書はPublic Lands and Pioneer Farmers: Gage County, Nebraska, 1850-1900 (Tokyo, 1971; New York, 1979) として英文でも出版され、日本におけるアメリカ経済史研究の水準の高さを遺憾なく示した研究でした。同時に、同書は「史料をして語らせしめよ」という徹底した史料実証主義に基づく先生のその後の研究スタイルを形作ったように思われます。「フィリップ・ロットの世界」（『史学』52巻1号、1982年）や「スレイター工場再訪：会計簿に見るアメリカ産業革命」（『社会経済史学』62巻2号、1996年）などに、そのスタイルがよく表れています。文字を読み解くのにすら骨の折れる手書きの日記や出納帳といった史料を丹念に用い、研究対象を分析していくという方法は、先生の生涯変わらぬ一貫した研究スタイルでした。

公有地政策やそれに関連して西漸運動などは先生の生涯の研究テーマでした。先の代表作を発表された後も、公有地政策に関連した多くの優れた研究を発表していますが、その代表的な研究11編は、著書『フロンティアと開拓者』（東京大学出版会、1994年）として纏められています。また環境問題についても早い時期から関心を持ち精力的に研究されていました。「ターナーとミュア：西部開拓と自然保護」（『アメリカ研究』22号、1988年）や「アメリカにおける森林保護前史」（『三田学会雑誌』81巻4号、1988年）などがそれです。先駆的な示唆に富んだ研究は、今日の環境問題に関心をもつアメリカ史研究者に大きな影響を与えるものでした。

初学者向けの通史の編纂や執筆にも精力的に取り組んでおられました。岡田・永田編著による『概説アメリカ経済史』（有斐閣、1983年）は、当時第一線で活躍されていたアメリカ経済史研究者達の共同執筆による優れた概説書として各大学で使用され、また今でも版を重ねております。何かの機会にこの本の話になり、その中で「あの本はよく売れたよ。」と先生にしては珍しく直截な物言いにちょっと驚いたのですが、おそらく編著者としてアメリカ経済史の妙味を多くの学生に伝え

られたのではないかという満足感が言わしめた言葉だったのかもしれませんが。その後も、いくつも通史を執筆されましたが、その集大成は定年直前に書かれた『アメリカ経済史』（慶應義塾大学出版会、2000年）でしょう。概説書の常としてアメリカ経済の発展を俯瞰したのですが、よく読んでみると先生が存命中に格闘された膨大な史料の痕跡が至る所にちりばめられていることがわかります。「史料をして語らせしめよ」という研究姿勢を生涯貫いた先生ならではの味わい深い概説書です。

学会の仕事にも多大の足跡を残されました。『社会経済史学』及び『アメリカ研究』の編集委員長、また社会経済史学会代表理事などを歴任されました。また2003年には当学会の代表理事にもなっただきました。ここに改めて本学会に対する先生のご尽力、ご貢献に対し心から感謝申し上げ、ご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

（折原卓美）